

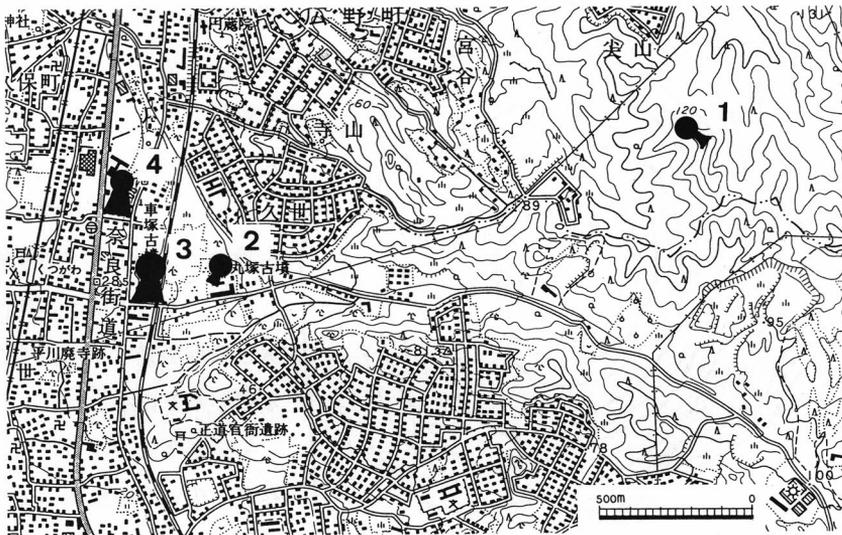
久津川古墳群を考える

奥村清一郎

1. はじめに

本論を起稿するに至った出発点は、平成4年11月8日に行われた近畿古代文化を考える会の例会で、久津川古墳群を踏査した時である。同会代表幹事の木戸岡宏さんから現地講師の依頼を受け、コース設定等の準備を進める中で、宇治一本松古墳を下見した時、太陽ヶ丘運動公園側から古墳に至る尾根つづきの部分が、前方後円墳の前方部になりそうな予感がした。例会の当日、従来円墳とされてきた一本松古墳が前方後円墳となる可能性のあることを指摘し、もしそうなら久津川古墳群の系譜を考えなおす必要が生じることを報告した。さらに、そのことを証明するため、前方部推定地の測量調査を実施したいとの何の見通しもない個人的な希望を述べたところ、即座に木戸岡さんから参加協力したいとの申し入れを受けた。

その後、共同研究者を募る等々の準備作業を進め、最終的に近畿古代文化を考える会の有志の方がたの協力を得て市民考古学実習の場として取り組むこととなった。現地の測量



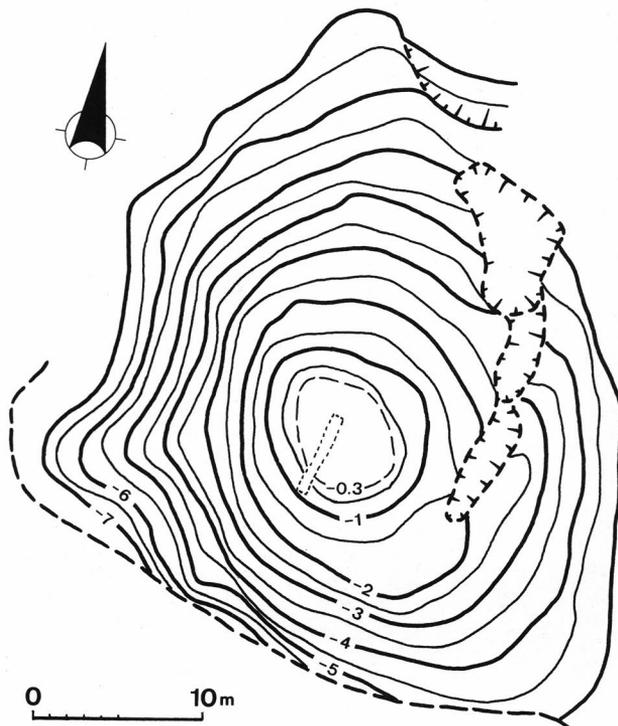
第1図 宇治一本松古墳の位置

1. 宇治一本松古墳 2. 丸塚古墳 3. 久津川車塚古墳 4. 芭蕉塚古墳

には、平成6年の11月から12月にかけての休日4日間をあて、会からは木戸岡宏、金子洋平、森田真弓、杉原久子、洋見吉美の各氏の参加を得た。また、宇治市教育委員会の杉本宏氏には、宇治市教育委員会が測量された後円部付近の測量図の借用や、現地での基準杭の確認作業などで全面的な協力を得たほか、何かと雑務の多い初日の測量作業を手伝って頂いた。これら多くの方がたの参加協力を得て今回の測量調査が実施できたことをここに銘記し、心からお礼を申し上げたい。

2. 宇治一本松古墳の研究略史

一本松古墳の存在が世に知られるところとなったのは、昭和30年代のことで、山田良三氏によって発見された。^(注1)その後、昭和40年に山田良三氏によって発掘調査され貴重なデータが公表されている。^(注2)墳丘は、南北径35m、東西径30m、高さ6.5mの2段築成の円墳と報告されている。報文中、「或いはこの尾根を利用した前方後円墳であったかも知れないが、林道敷設によってかなり地形は変形されている。」との記述があり、この時既に前方後円墳の可能性も考慮されていたことが窺える。墳頂部からは、円筒埴輪片のほか、二重口縁の土師器壺の口縁部片が出土している。主体部は、割竹形木棺を収めた竪穴式石室で、既に乱掘されていたものの、鉄片、管玉、剣、刀子、鉈、斧などの副葬品が見いだされた。



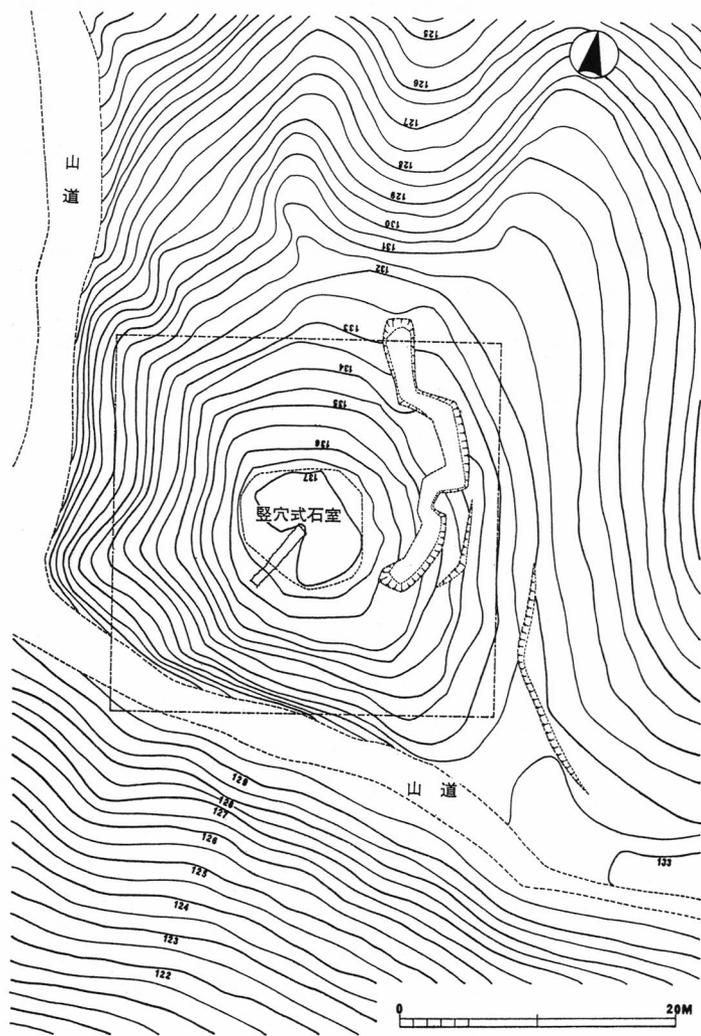
第2図 山田良三氏が測量した宇治一本松古墳

山田氏は、「(前略)4世紀代の古墳と思う。(中略)久津川古墳群の中では最古の古墳で、久津川古墳群の起源を知る上にとっては、宇治一本松古墳の占める意義は大きい(後略)」と評価した。その後山田氏は、「(前略)4世紀中葉をくだらず、久津川古墳群では最古の古墳(後略)」とし、一本松古墳から西山・尼塚古墳群を経て平川古墳群に至る編年案を提示した。^(注3)

平良泰久氏は、二重口縁壺の存在と碧玉製腕飾類の欠落に注目し、築造年代を4世紀中葉に求めた。古墳の評価については、

埴輪・葺石を伴う円墳の単独墳という共通項により、一本松古墳、庵寺山古墳（4世紀後半）、金比羅山古墳（4世紀末～5世紀初頭）とつづく首長墓系列を想定し、久津川古墳群の中では傍系とも言うべき位置づけを行った^(注4)。杉本宏氏もこの考えを踏襲して^(注5)いる。

昭和57年、宇治市教育委員会によって墳丘の測量調査が行われ、墳丘の形状を詳細に知りうる貴重なデータが公表された^(注6)。墳頂部付近の地形は、先の山田氏の調査報告に掲載さ



第3図 宇治市教育委員会が測量した宇治一本松古墳

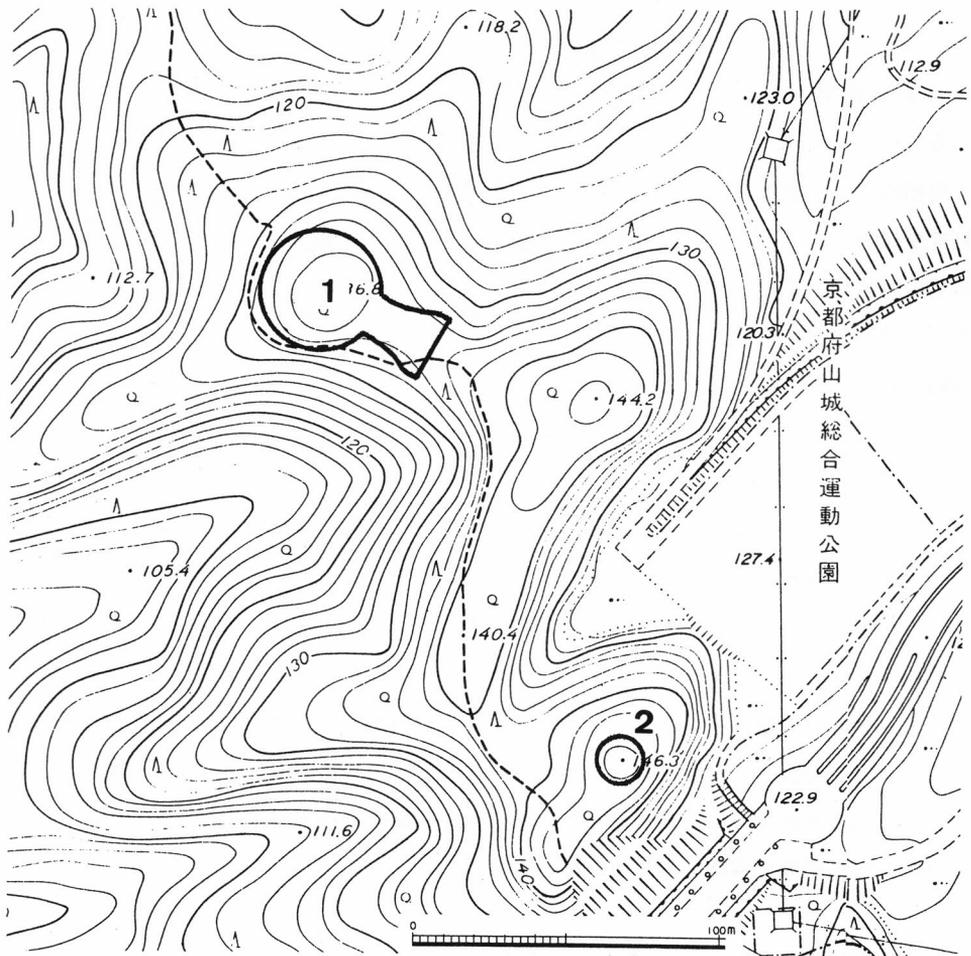
れたものと酷似しており、旧状は良く保たれていることがわかる。墳形については、従来の見解を否定し、一辺28mの方墳とみる見解が提示された。しかし、測量図によると、主体部が方墳の対角線方向に設営されたこととなり、極めて不自然である。その後宇治市教育委員会から発行された印刷物によると、円墳となっているので、方墳説は比較的短時日のうちに撤回されたものと思われる。今回我々が実施した測量は、この時に作成された図面に前方部推定域を追加・補足する形で実施した。

3. 測量調査の概要

宇治市教育委員会が設定された測量杭の多くは既に腐朽してしまっていたが、かろうじ

て残存する2点の位置関係とポイント高を参考に前方部推定地の測量を行い、宇治市保管の測量図と重ね合わせたのが第5図である。

私が地形観察からこの古墳を前方後円墳とみる根拠は、二つある。まず第1に、円丘の南東側に前方部を営むのにふさわしい長さと同幅をそなえた尾根地形が延びていること。これを利用してはいないはずはない。築造段階での切り土工事の部分省略や林道敷設に伴う改変、地すべりなどで現在の状況になっているが、古墳築造時に用意された設計図は前方後円墳であった可能性は高いと考えた。第2に円丘部をめぐる等高線が、南東部で「コ」の字状に張り出す点である。標高132.5m等高線から標高136m等高線までが一様に張り出している。これは尾根地形の残存状況などによるものではなく、後円部と前方部をつなぐスロープ状の遺構とみるべきであると考えたことによる。

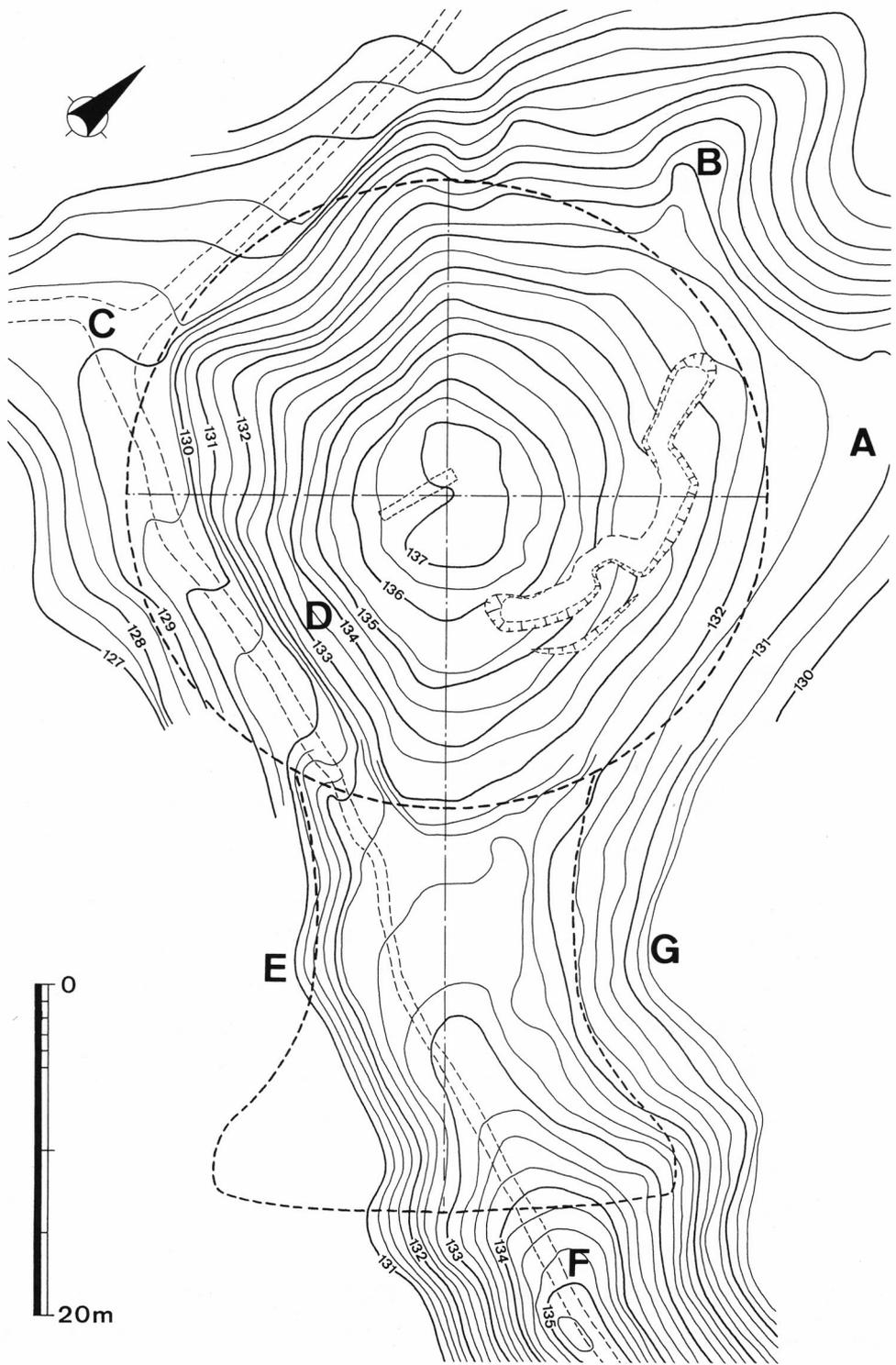


第4図 宇治一本松古墳周辺の地形
1. 宇治一本松古墳 2. 一本松南古墳

古墳は、墳頂部の標高137.5m前後を測る丘陵の頂部に営まれており、古墳からは三方に尾根が延びている。この3本の尾根上にはそれぞれ山道が通っており、古墳の西側のC点付近で交差している。このうち、C点から北へ延びる山道が通る尾根と、南西方向へ延びる山道が通る尾根は、いずれもやせ尾根で、かつて前方部が存在した可能性は極めて低いと考え、測量の対象から除外した。墳丘の基底線は、円丘部の北東側で標高132m等高線付近をめぐるものと思われる。細かく観察すると、A点付近では、標高131.5m等高線が北東側に張り出し、この方向に下がる小さな尾根地形が始まることを示している。これに対し、標高132m等高線は整った円弧を描いており、この2本の等高線の間認められる傾斜変換点が、墳丘の基底と考えられる。同様にB点付近でも、標高132m等高線付近に認められる傾斜変換点が墳丘基底とみられる。円丘部の北西側は、C点から北へ延びる山道に向かって急角度で下がる斜面となっていて、基底はもとより、墳丘の斜面全体が流失してしまっているものと判断される。この傾向がさらに著しいのは南西側の斜面である。D点付近では切り立った崖状を呈しており、山道の造成によって墳丘が大きくえぐられたことを示している。

問題は、円丘部の南東側である。A点付近で求めた墳丘基底を南へ追いかけて行くと、円丘部から離れ、尾根の側面に至る。G点の西方を走る標高131.75m～132.25mまでの3本の等高線は、等間隔でなだらかなカーブを描いて外反しており、円丘部の基底と同じレベルを保って人工的に整えられた傾斜面である可能性は極めて高いと考えられる。この人工の傾斜らしい特徴は、G点付近まで下がるに薄れ、自然の谷状の地形となっている。この人工の斜面と自然の谷状地形との境目がこの古墳の前方部の左側面の基底となるものと判断される。これらの等高線は、南東方向に延びた後、急激に外反し、いわゆるバチ型の前方部を意識したかのような動きをとり、不明確ではあるが隅部を形作った後にやせ尾根の斜面に吸収されて行く。前方部の右側面と推定されるE点付近は、急斜面となっており、D点同様古墳本来の斜面は失われてしまっている。F点付近は、前方後円墳とした場合、前方部前面に相当するが、稜線を加工したような形跡は現状では見だし難い。

本項の冒頭でも述べたように、前方後円墳として推定復原してみたのが第5図で、後円部と前方部の外形線を破線、中軸線とこれに後円部中心点—いわゆるO点—で直交する線を一点鎖線で示した。墳丘の基底高は先に検討したとおり、後円部・前方部ともに標高132m前後のほぼ同一レベルに置いていることが明らかとなった。後円部の基底径は、比較的残りの良い北東部での等高線の動向をもとに推定復原し、O点は竪穴式石室の直近の東側、標高137m等高線が入り込んでいる地点に求めた。こうしてみると、後円部の左側面は、一部溝状の既掘坑によって荒らされているものの、全体にO点を中心とする整った



第5図 宇治一本松古墳測量図

円弧を描いており、古墳本来の形状を比較的良くとどめているものと考えられる。この部分の墳丘斜面の中腹、標高134m等高線付近で等高線の間隔がやや広くなっており、2段築成された段築平坦面と思われる。墳丘の中軸線は、後円部南東斜面で認められるスロープ状遺構の中心に求めた。前方部は、左側面で認められた基底線をもとに中軸線で反転して全体を推定復原した。前方部前端線については、左隅部から自然な形で中軸線と結んで反転復原してみた。このF点付近での切り土工事の省略のみをもって前方後円墳ではないとみる否定的な見解も仄聞するが、前方部前端の切り土工事の不充分な前方後円墳の類例を日本全国に求めると、枚挙にいとまがないのも事実である。

もし仮にF点付近の地形が、全くの自然地形とみるなら、北西から南東方向に走る主尾根から北東方向と南西方向の2方に延びる2本の支尾根が派生した地形ということになる。そうすると、F点の北西約3m地点が、主尾根と支尾根の稜線の交差点となる。一般的にみて、自然の浸蝕作用によって出来あがった丘陵地形では、尾根の結節点付近が周囲より高く残る傾向が認められる。ところがF点付近の場合、最高点は主尾根と支尾根との結節点ではなく、F点の南東約4.5m地点に求めることができる。この地点は、主尾根の両側に谷地形が展開する、やせ尾根となっており、最高点のありようとしては、極めて不自然であると認めざるを得ない。したがって、F点の両側で認められる等高線の湾入は、人為的なもので、計画的に陸橋部を確保した上で両側面の切り土工事を施した跡とみるべきであろう。

上記の作業で復原できた墳丘の平面規模は、全長61.4m、後円部径37.2m、前方部幅27m、くびれ部幅17.5mとなる。墳丘の高さは後円部で約6m、前方部で約2mを測る。中心主体の竪穴式石室は、南北方向に主軸を置いており、墳丘の主軸線とは斜交している。

4. 墳形モデルはどこからきたか

宇治一本松古墳にバチ形に開く前方部がとりつく。この点を手がかりに椿井大塚山古墳と比較検討してみる。全長は、椿井大塚山古墳の193m^(注7)に対して一本松古墳が61.4mで、椿井大塚山古墳の31.8%の規模であることがわかる。ただし、前方後円墳の実測図を重ね合わせて比較検討する際、ただ莫然と全長を縮尺調整して重ねるのではなく、後円部径を正確に縮尺調整して重ね合わせ、その上で前方部各部の相似度を検証する方が、より厳密な比較検討手法であることは、これまで何度か指摘してきた。そこで、後円部径を100とした場合の前方部各部の寸法を指数化したのが付表1である。表中、くびれ部幅指数は、椿井大塚山古墳の47.3に対して、一本松古墳が47.0となっており、ほぼ同じ比率で設定されていることをしめしている。前方部前端幅指数も78.2と72.6となっており、両者の相似

付表1 椿井大塚山古墳と宇治一本松古墳の規模

古墳名	全長	後円部径 同指数	くびれ部幅 同指数	前方部長 同指数	前方部前端幅 同指数
椿井大塚山古墳	193m	110m 100	52m 47.3	83m 75.5	86m 78.2
宇治一本松古墳	61.4m	37.2m 100	17.5m 47	24.2m 65.1	27m 72.6

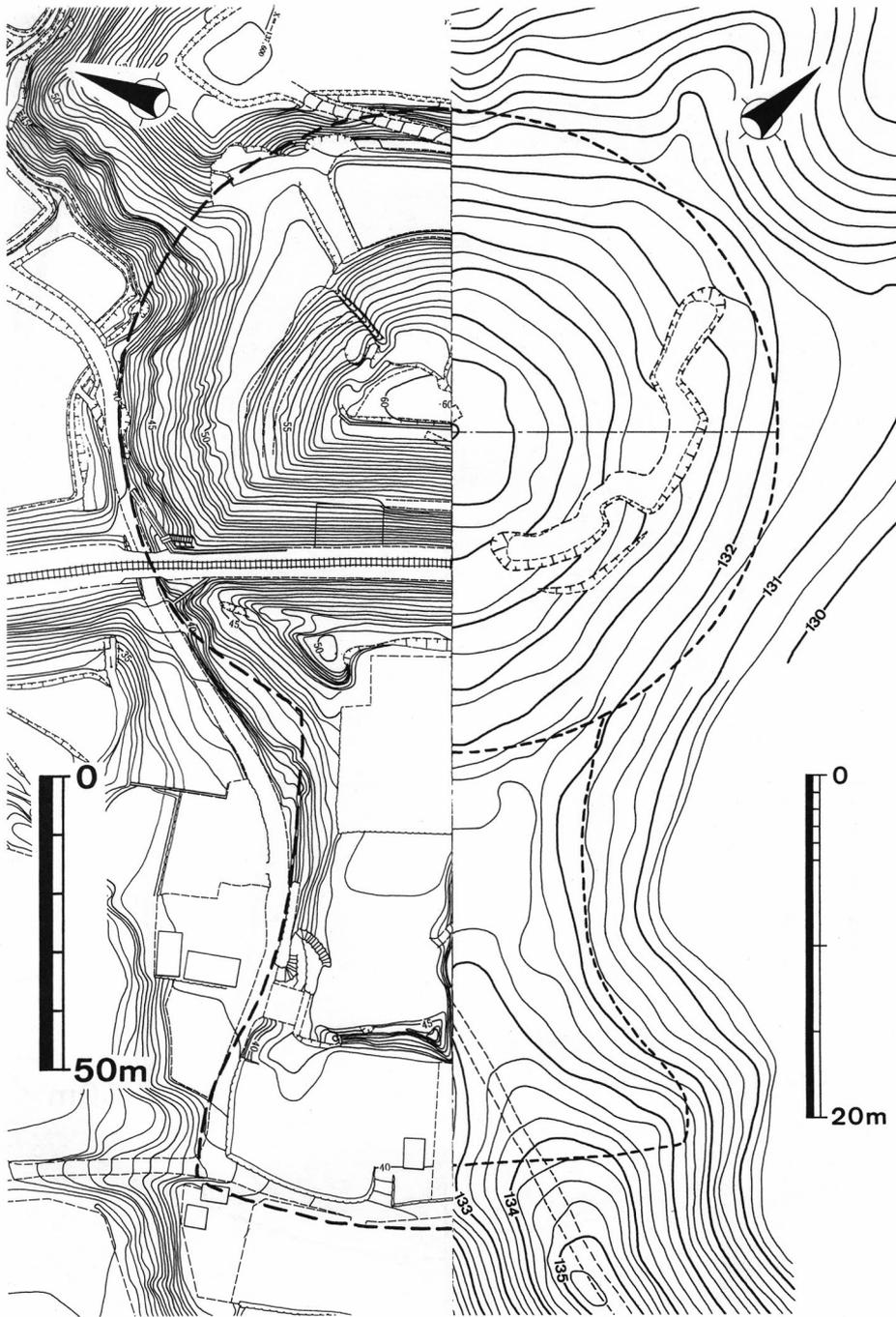
度は比較的高いといえよう。とくに数値に開きが認められるのは前方部長指数で、椿井大塚山古墳の75.5に対して一本松古墳は65.1となっている。以上の作業を図上で検証するため、後円部径を縮尺調整して同じ大きさにし、中軸線で半截した測量図を突合してみたのが第6図である。前方部前端線が若干のくい違いをみせているものの、全体として相似度は高いことが窺える。

ところで先にもふれたが、一本松古墳の前方部は、墳丘を明示するため両側面をえぐり込んでいるものの前面は陸橋部状遺構となっていて、前方部の前端線は遺構としてはとらえにくくなっている。前項で設定した復原ラインは、前方部左隅から自然な形で中軸線と結んだ推定復原線であるため、流動的要素は高い。ただし、流動的ではあっても現状の復原ラインより後円部寄りにとると極めて不自然であり、むしろ外回り気味に推定復原してもとくに違和感はないものと思われる。もしそのような線引きをするなら相似度はさらに高くなることとなる。

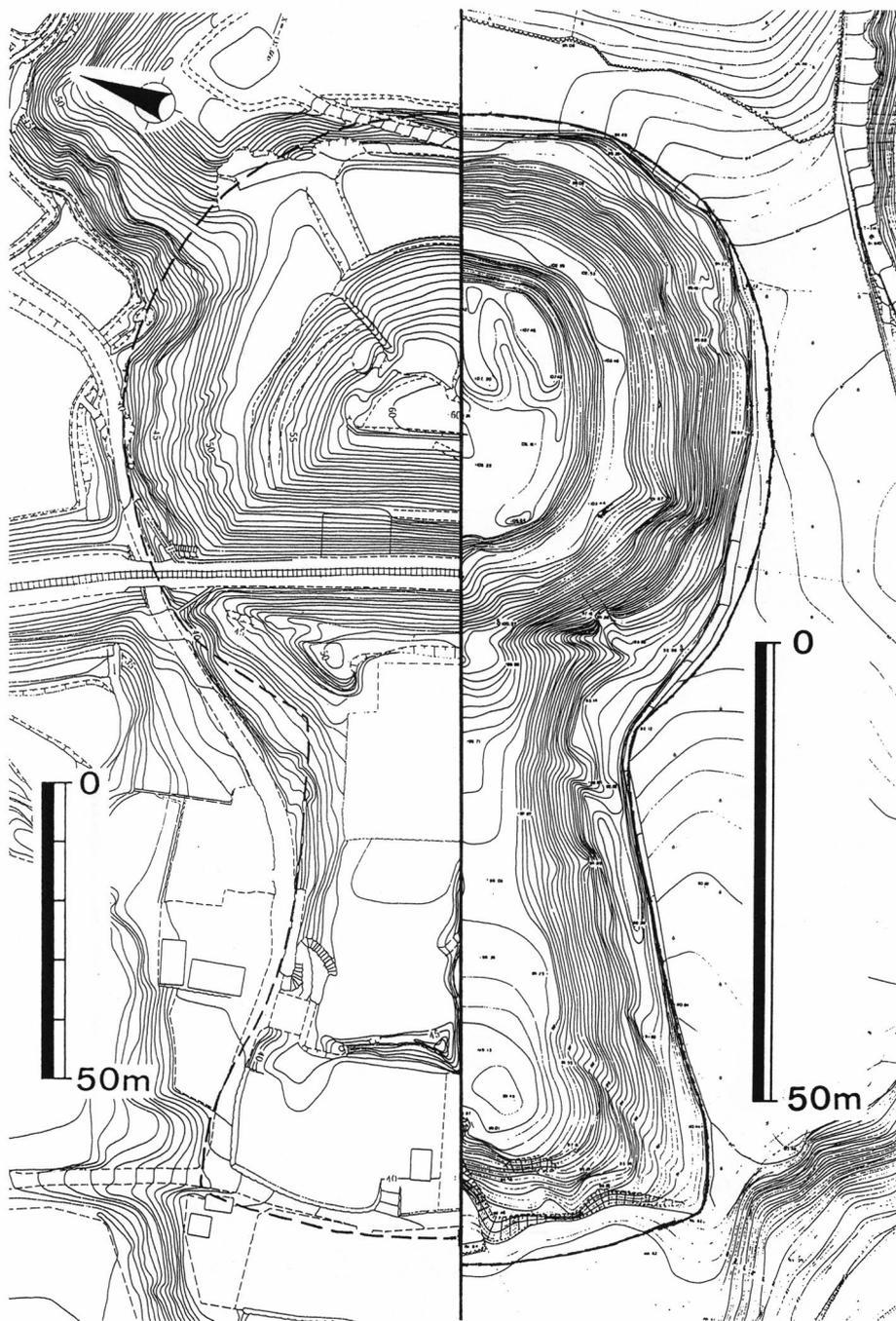
つぎに、墳丘の主軸線と中心主体である竪穴式石室との関係を検討してみることにする。椿井大塚山古墳は、墳丘主軸線を座標北に対して約70度東に、主体部の主軸を約6度東にそれぞれ設定して営まれている。つまり、主体部は北頭位を意識しつつも墳丘主軸線とは平行も直交もせず、約64度の振れ角で斜交しているのが特徴である。一方の一本松古墳は、墳丘主軸を磁北に対して約48度西に、主体部の主軸を約11度東にそれぞれ設定して営まれている。椿井大塚山古墳と同様に、主体部は北頭位にとり、墳丘主軸とは約59度の振れ角で斜交している。このように、墳丘主軸と主体部との配置関係についても両古墳は共通する要素を備えていることがわかる。なお、椿井大塚山古墳の築造企画についてはかつて検討し、中山大塚古墳の約1.5倍形であることを説いたことがある^(注8)。細部の検証は拙稿にゆ

付表2 中山大塚古墳と椿井大塚古墳と一本松古墳の規模

古墳名	全長	後円部径	前方部幅
中山大塚古墳	124m	70m	56m
椿井大塚山古墳	193m	110m	86m
一本松古墳	61.4m	37.2m	27m



第6図 椿井大塚山古墳(左)と宇治一本松古墳(右)
椿井大塚山古墳の測量図は、『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』
(京都大学文学部 平成元年)から一部改変の上転載



第7図 樺井大塚山古墳(左)と中山大塚山古墳(右)

中山大塚山古墳の測量図は、『磯城・磐余地域の前方後円墳—奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第42冊』(奈良県教育委員会 昭和56年)から一部改変の上転載

ずり、ここでは3古墳の平面規模の比較表(付表2)と、中山大塚古墳と椿井大塚山古墳の半截図面(第7図)を揚げておく。

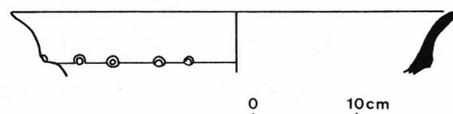
以上の検討により、宇治一本松古墳の築造にあたって用意された設計図は、中山大塚古墳に祖型をおき、椿井大塚山古墳を経て導入されたもので、その大きさは椿井大塚山古墳の約3分の1の企画になっていることが明らかとなった。

5. 一本松古墳から西山7号墳へ

宇治一本松古墳は、久津川古墳群の中では最も奥まった丘陵の頂部に立地する点や、竪穴式石室を内部主体とする点などによって、山田良三氏によって発見されて以来、久津川古墳群内最古の首長墓であるといわれてきた。この点については、現在なお訂正を必要としないが、墳形を円墳であると認定してきたため、遺跡の評価は今一歩釈然としないうものがあつた。初代の首長墓でありながら、その系譜は久津川車塚古墳には受け継がれない。一本松古墳に始まり、庵寺山古墳、金比羅山古墳へとつづく、久津川古墳群内でも北辺に墳墓地を求めて円墳を築きつづけた、いわば傍系ともいふべき首長墓系譜を想定した平良泰久氏ほかの見解も、さほど説得力あるものとは思われない。

ところが今回の作業によって、従来円墳とされてきた一本松古墳が、実は前方後円墳であることが判明した。このことにより、古墳の評価についても、過小評価ともいえる従来の見解を改め、極めて穏当なところにおちつかせることが可能となった。尾根を下って行けば、久津川古墳群全ての古墳と通じる一方、久津川車塚古墳墳丘上を始め広範囲の地域から仰ぎ見ることができる立地条件、椿井大塚山古墳の3分の1の大きさの墳丘形態、埴輪・葺石等の外表施設、竪穴式石室からなる内部構造のいずれもが当地域に成立した地域政権の初代首長の墓、つまり始祖墳にふさわしいものである。前方後円墳に始まり前方後円墳をもって継承されて行く王権、これこそが時代の約束にかなった地域政権の自然な姿といえよう。

築造年代を求める資料としては、土師器と埴輪が有効と思われる。土師器は、復原口径43cmを測る二重口縁の口縁部片で、屈曲部外面に竹管刺突文をめぐらす。類似の資料は、京都府管内では綾部市成山3号墳で埋葬施設の蓋に使用されていたものが知られている^(注9)。桜井茶臼山古墳例のような儀器化した二重口縁壺もしくは土器棺墓として使用されたものの断片と思われる。形式的には、いわゆる庄内併行期に属するものと思われる。埴輪には、復原径42cmを測る大型の円筒埴輪片のほか、朝顔形埴輪らしい断片も出土して



第8図 宇治一本松古墳出土の土師器

いる。タガは断面逆台形で鋭く突出し、その直上を直線的に切り込んだスカシ孔の一部が確かめられている。さらに山田良三氏は、「内側に輪積みの痕跡を残し、大和メスリ古墳出土に見られるような、非常に大型の円筒埴輪になると察せられる破片も出土している。」と報告している。これ以上詳しい情報は、現段階では得られないものの、久津川古墳群内では最古段階に編年されるとともに、直径30m級の円墳には不釣り合いな大型品が含まれる点に注目しておきたい。ここでは、儀器化した、古相をとどめる土師器壺と最古式の埴輪の供伴例と理解し、この古墳の築造年代を和田編年^(注10)2期に求めることとしたい。

ただし、一本松古墳は久津川古墳群中最古の古墳とはならない。一本松古墳以前にさかのぼることが明らかな古墳の例として芝ヶ原12号墳(芝ヶ原古墳)が知られている^(注11)。この古墳は、典型的な庄内式土器を伴うことから、古墳とみるか弥生墳墓とみるか議論の分かれるところであるが、ともかく庄内併行期には芝ヶ原古墳群の造墓活動が開始されていることをしめしている。こうしてみると、芝ヶ原、西山、上大谷、尼塚などの丘陵地を占める前期型古墳群の中には、芝ヶ原12号墳(芝ヶ原古墳)のほかにも一本松古墳より古い古墳が含まれているかまたは含まれていたが消滅してしまった可能性は高い。

一本松古墳は、久津川古墳群内においては、これらの丘陵地に前期型の古墳群を形成した諸集団の政治的統合のシンボルとして、対外的には椿井大塚山古墳を介した大和政権との一定の政治的関係の成立の証しとしてかの地に出現したものと考えられる。

一本松古墳の後を受けて、首長権を継承したのは、西山7号墳である。この古墳は、未調査のまま消滅してしまったため、全長60m前後の前方後円墳で平縁舶載鏡と石臼を伴うこと以外詳しいことはわからない^(注12)。しかし、西山古墳群内では最高所を占めているとともに、東方の同一丘陵南斜面には上大谷古墳群、西方眼下には平川古墳群、南方には芝ヶ原・尼塚古墳群を望む、あたかも扇の要のような好適な立地条件をそなえていることからみて、成立年代を和田編年3期に求めて大過ないものと考ええる。

西山7号墳は、久津川古墳群における首長墓の縦系列の確立をしめすとともに、かつて政治的統合を達成した諸集団との間を同族関係で結ぶ、貴重な役割を果たしたと考えられる。すなわち、久津川古墳群のうち、丘陵地に墓域を求めた前期型の古墳群および単独墳の多くは、和田編年4期から5期にかけての頃に築造されていて、しかもそれらは無秩序に営まれたのではなく、墳丘形態の上では前方後円墳を頂点とし、前方後方墳、円墳、方墳の順に序列化された、全体としては多数の小方墳を低辺とする整ったピラミッド状を構成しているのが特色といえる。各古墳群および単独墳は、始祖である一本松古墳およびその後継者である西山7号墳との同祖同族関係を体現するように墳墓地を選定し、厳密な約束のもとで造墓活動を行ったものと見られる。つまり、一本松古墳を始祖とする久津川古

墳群の前期のありようは、和田編年2期に諸集団を統合して成立した首長権が西山7号墳へと継承され、前代の統合に参画した小集団は、首長一族からの枝族分岐という形で丘陵地に墓域を設定して行ったものと理解される。各古墳群および単独墳は、各古墳群間および古墳群内の各古墳間においても、墓域の設定から墳丘形態、外表施設、副葬品に至るまで、首長墳との段階的格差の産物として出現するのである。

6. 箱塚古墳から芭蕉塚古墳へ

久津川の首長一族は、前期末ないしは中期初頭には墓域を平川の台地上に移し、和田編年5期頃に箱塚古墳を築造するに至る。この古墳は、古くに破壊されたため、全長約90mの前方部のさほど開かないタイプの前方後円墳で周濠を伴うこと、主体部は後円部に竪穴式石室、前方部に粘土槨を営み、前方部の主体部から仿製三角縁神獸鏡と画文帯四獸鏡各1面が出土したことなどが知られている程度だが、久津川の首長一族が古墳中期に飛躍的な発展をとげ、南山城一帯を支配下におくまでになる原点ともいべき重要な画期を形成した首長墓と評価しうる。

首長権は、箱塚古墳の後、丸塚古墳^(注14)(帆立貝式前方後円墳、和田編年6期)、車塚古墳^(注15)(和田編年7期)、芭蕉塚古墳^(注16)(和田編年8期)の順に継承されたと見られる。大谷川によって形成された扇状地性の低台地上に、南面する前方後円墳を4代にわたって築いており、この間に首長権の世襲制が確立され、権力の一点集中が急速に達成されたことを物語っている。このうち、最大規模の車塚古墳には応神陵古墳型の墳丘に二重周濠を伴い、竜山石製の長持型石棺を内蔵していることから、被葬者は大和政権中枢部との密接な政治的関係を背景に地域政権の王として君臨したことを窺わせる。

平川古墳群の群構成は、箱塚古墳は不明だが丸塚・車塚・芭蕉塚の首長墳にはそれぞれ至近距離に山道古墳^(注18)、鍛冶塚古墳^(注19)、青塚古墳^(注20)といった中規模クラスの方墳を伴うのを一つの特色としている。さらにその縁辺部には、前期に丘陵地に墳墓地を求めた枝族の墓域が設定された可能性が高い。大竹古墳、赤塚古墳などが現在までに確認されている数少ない例だが、大久保から寺田にかけての低台地上には古絵図等でその存在を確認できるいわゆる塚および塚地名は多く、今後の調査でこの種の中期型の中・小規模の方墳・円墳が追加確認される可能性は極めて高いと考えられる。すなわち、1基の前方後円墳を頂点とし、多数の小方墳を底辺とする、階層差を反映したピラミッド構造が再編・整備され、そのピラミッド構造は、中期のいずれの小期においても一貫して認められるのが平川古墳群の群構成といえよう。

このような、古墳に認められる階層性は、丘陵地に墳墓地を求めていた前期の段階と基

本的には変わるところはない。ただし、古墳群に体现される地域政権の版図と墳形の格付けの仕方において相違点を認めることができる。前者については、前期には木津川右岸の一部であったものが、中期になって南山城全域に及んだと考えられる点を挙げうる。城陽市の南部にある梅ノ子塚古墳についても版図外の古墳とみてよい。後者については、首長墳につぐ格付けの墳形が前方後方墳から中規模方墳に代替される点や、新規に帆立貝式前方後円墳や造り出し付き円・方墳などの墳形が加わる点などを指摘できる。

7. 後期の久津川古墳群

和田編年8期に営まれた芭蕉塚古墳を最後にして、久津川古墳群から広域首長墳と呼ぶに値する前方後円墳は途絶える。これは、対外交渉の点においては、大和政権との政治的諸関係の変化を反映するとともに、南山城地域内の状況としては、宇治二子塚古墳の突発的出現と深く関わるものとみて大過ないであろう。この宇治二子塚古墳は、古墳後期としては京都府下最大規模を誇る全長112mの前方後円墳で、久津川車塚古墳と同様二重周濠を伴うことが知られている^(注21)。墳形は、継体真陵といわれる今城塚古墳と同じタイプで規模は今城塚を3分の2に縮小したものであることが、宇治市教育委員会の調査で明らかにされている。久津川の首長一族とは別系統の、宇治川右岸に本拠をおき、継体政権と深くかわる新興の広域首長墳である。築造年代は、和田編年9期に比定される。

ひるがえって、久津川の首長一族はどうなったか。広域首長墓の系譜が断絶したからといって地域政権が完全に消滅したわけではない。弥生時代以来平野部または台地上にあった居住地が、古墳後期に至って芝ヶ原から正道にかけての丘陵上にまで進出し、そこに大規模な集落を展開させている。これは、人口増加に伴い居住域が大幅に拡大されたことを物語るもので、その前提として農業生産性の飛躍的な向上が達成されたものと推察される。また時代が下って、奈良時代には地域内に広野廃寺、平川廃寺、久世廃寺、正道廃寺の4ヶ寺が相次いで創建されている。これらの事実を勘案するなら、古墳時代の前・中期に久津川古墳群を生み出した地域政権は、後期をむかえて滅亡・集団移住などの歴史をたどったとは考え難い。むしろ枝族分岐の歴史をたどりながら順調な発展をとげ、古墳後期を経て奈良時代には有力枝族ごとに氏寺を建立するまでになったとみるのがごく自然な理解であろう。

久津川古墳群内には、北から坊主山1号墳、長池古墳、青山1号墳、石神1号墳、丸山1号墳の計5基の後期型前方後円墳が知られている。規模は、最大の長池古墳で全長約50mで、中期の段階と比べるといくぶん縮小してはいるが、数の上では京都府南部全域を見わたしても、嵯峨野と並ぶ密集地を形成している^(注22)。広域首長権こそ宇治川右岸の宇治二子

塚古墳に譲りわたしたものの、地域政権としては前代同様前方後円墳を築く集団であり続けたことがわかる。これらの前方後円墳は、単独(長池古墳)あるいは10基未満の古墳群の中核墳として円墳数基を従えており、主体部は坊主山と長池が木棺直葬で他は横穴式石室を導入している。築造年代は、いずれも和田編年10期に属するものと推察される。

このような後期型前方後円墳のあり方をどうみるか。上記の自然な理解の上に立つなら、これらの前方後円墳は、首長一族およびそこから分岐した有力な枝族の築造になるものと見るべきであろう。すなわち、前代に首長と有力枝族の墳墓地を大久保から寺田にかけての台地上に集結させた久津川古墳群の中核部は、後期をむかえて墳墓地を再度丘陵地に求め、枝族ごとに小規模な古墳群を形成するに至ったものと考えられる。首長墳は規模を縮小化する一方、有力枝族の族長墳も前方後円墳を採用したため、ほぼ時を同じくして5基の前方後円墳が出現することとなった。墓域は、坊主山古墳群のみが比較的居住地に近い場所に設定されたが、その他の古墳群は居住地の南方、長池から青谷にかけての丘陵地に設定された。その要因としては、居住地近辺の土地利用が進展し、やむなく南方に求めたというよりむしろ、横穴式石室に使用する石材の採取地により近い地点が求められたことによるものと推察される。

上記の5ヶ所に設定された墓域のうち、南山城地域ではいち早く横穴式石室を導入していること、埴輪を伴う古墳が多いこと、馬具・須恵器等豊富な遺物を伴うこと等からみて、青山古墳群が先進的であつ充実した内容を誇っていることがわかる。芭蕉塚の系譜をひく首長一族の後期の墳墓地をあえて特定するなら、青山古墳群がその最も有力な候補地といえよう。

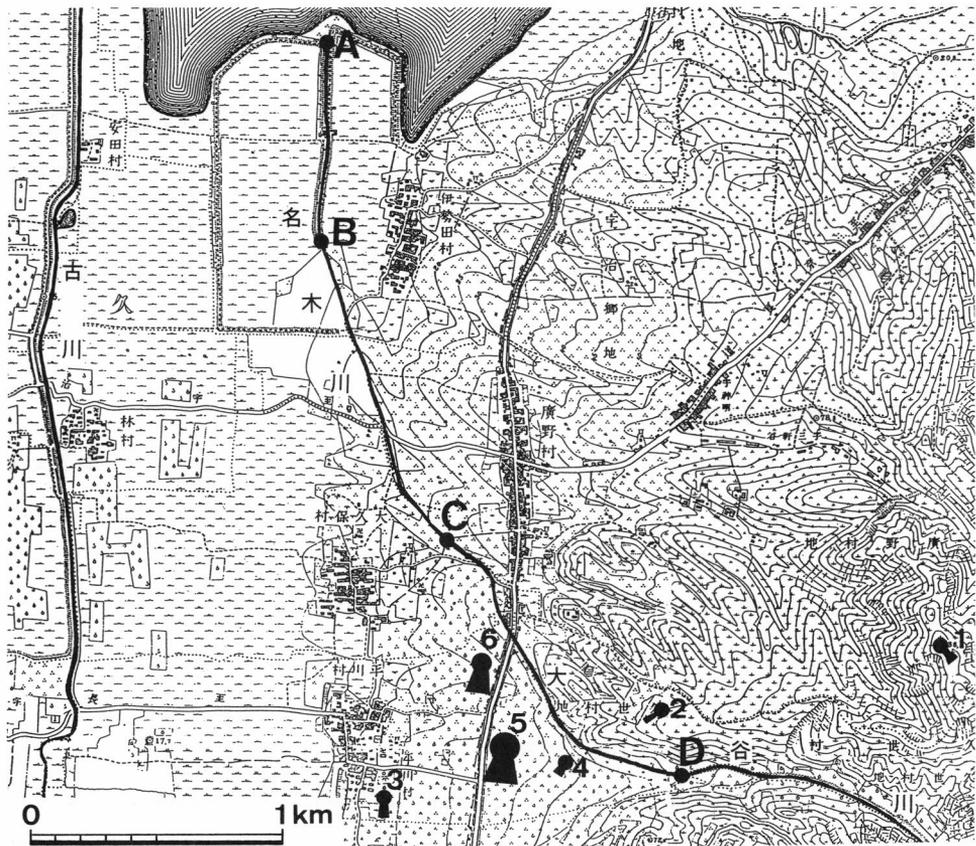
8. 平川古墳群と栗隈大溝

古墳時代中期における平川古墳群の成立と、『日本書紀』仁徳12年条にみえる栗隈大溝開削の記事とを表裏一体の史実と考える研究者は多い。しかし、現在のところ栗隈大溝の所在地は確定していないし、それらしい遺構が発掘調査で見つまっているわけでもない。そこに大きな古墳があるからその前提となるような水田開発工事があった、これでは単なる思い込みの世界であり、学問とはいえない。ここでは、主として考古学の方法論によって古くて新しいこの問題にとり組んでみたいと思う。

栗隈大溝については、近世以来多くの書物・著作にとりあげられている。今その所在論を列挙すると、長池集落の北方、現在のJR長池駅の北東側にあった細長い池に求める説^(注23)、水主付近の水路とする説^(注24)、木津川右岸の沖積平野を北流する古川をあてる説^(注25)、平川古墳群の東方を北西流する大谷川とする説^(注26)、大久保集落から北西流する名木川とみる説^(注27)などが挙

げられる。このうち、長池説と水主説については、栗隈の本拠地から遠く離れた位置関係、周辺の地形その他からみて、可能性は極めて低いと考えられる。

古川(第9図参照)は、長池から水主にかけての谷水や自然の湧水を集めて寺田付近から平野部を直線的に北流し、巨椋池に注ぐ人工の水路である。この古川の開掘年代を、仁徳朝すなわち平川古墳群の形成期まで遡らせようとする研究者は多い。一方、この古川は久世郡条里の里界線となっていることから、条里制施行時に改修が行われたとみる、仁徳朝創設、推古朝改修説をとる見解もある^(注28)。問題となるのは、古墳中期に後世の条里地割の基準ラインとなるような、広域にわたる正南北地割が存在し得たかどうかである。まず手始めに古墳の主軸方位と条里地割の方位との関係を検討してみよう。車塚古墳の主軸は、磁北に対して約21度東、芭蕉塚古墳の主軸は同じく約17度東に振れている。沖積地の条里地割とは車塚で約15度、芭蕉塚で約11度の振れ角を持っており、方位をもって両者の土木工事の同時代性を立証することは不可能である。つぎに古墳時代中期の段階において、後世



第9図 栗隈大溝推定河道と歴代首長墓

1. 宇治一本松古墳 2. 西山7号墳 3. 箱塚古墳 4. 丸塚古墳 5. 車塚古墳 6. 芭蕉塚古墳

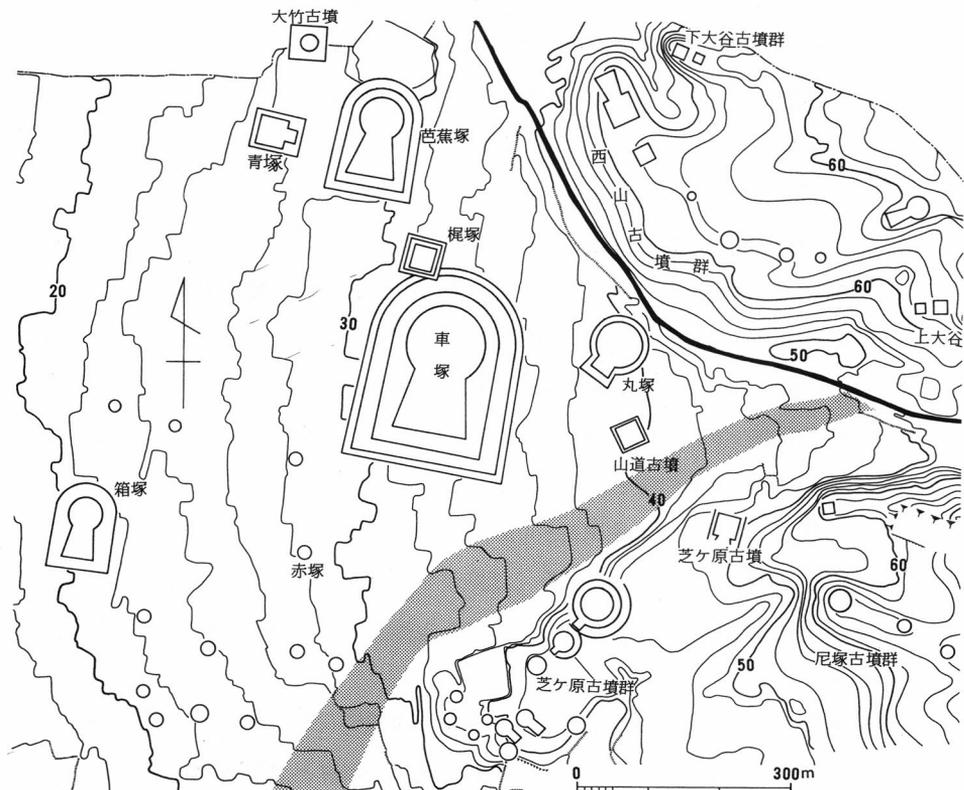
の条里制の祖型となる様な規格化された方格地割が存在した可能性ををさぐってみたい。近年日本の各地で水田遺構が発掘調査されている。京都府南部でも、田辺町興戸遺跡や京都市伏見区水垂遺跡などで古墳時代の水田遺構が検出されている。これらの水田遺構に共通する特徴として、自然の傾斜方向に合致させた地割を行っていること、小区画の水田を原則としていることなどが指摘される。つまり、古墳時代までさかのぼる真東西南北方向を意識した大規模な方格地割は、少なくとも京都府南部では現在のところ認められない。以上の検討の結果、古川については、久世郡条里の起源については木津川流域の平野の開発の歴史を探る上での条里遺構の一つとして研究の対象となりうるもので、『日本書紀』仁徳条と推古条に記された栗隈大溝との混同はさけるべきだと考える。

つぎに大谷川説をとり上げてみる。大谷川は宇治丘陵の中を西流し、谷筋から平野部に出た城陽市平川周辺に扇状地性の台地を形成した小河川である。現在の流路は、扇央部で流れを北西方向にとり、西山古墳群がかつて存在した丘陵の腹部または裾部を不自然にも等高線と平行して大久保へ流れている。この扇央部(第9図D点)から大久保(第9図C点)までの間約1.3kmの流路は、明らかに強制的に導水された人工の河道である。栗隈大溝大谷川説の論点は、平川古墳群は大谷川のつけ替えを前提条件として成立し得た。したがって上記区間の大谷川が栗隈大溝であると説く。つまり、流路が不安定であった大谷川を人工的に北へ回させ、墳墓地が洪水に見舞われる危険性を取り除いてから古墳造りに着手したとみるのである。はたして、河川のつけ替え工事をしてまで墳墓地を確保したのだろうか、たびたび流路となるような地点に古墳造りを構想したのだろうか、やはり仁徳紀の記述どおり農業用水確保のために施工されたのではないか。素朴な疑問がわいてくる。古墳時代の大谷川は一体扇状地のどこを流れていたのか。第10図は城陽市教育委員会で作成された地形図を加工したもので、図中の黒塗りの太線が大谷川の現在の流路、網点で表わした部分が幅50m~100mを測る谷状地形である。この谷状地形は、扇状地の南端、芝ヶ原丘陵の北麓、山道古墳の南側を南西方向に走っており、古墳時代から奈良時代にかけての大谷川は、この谷状地形の中を若干流路を変更しながらも安定的に南西流していた可能性が高い。ただし、赤塚古墳の南東約150m地点以下のレベルでは、等高線の連続的湾入傾向は不明確となり、洪水のたびに大きく流路が移動したものと思われる。赤塚古墳の南方、平川廃寺の境内南端部で検出されている砂レキ層も、大谷川の流路変更に伴う堆積層と考えられる。

以上の検討により、平川古墳群がのる扇状地は、古墳時代においては洪水に見舞われる危険性はほとんどなかったと考えられる。現在、丸塚・車塚・芭蕉塚等の周濠は、大量の土砂に埋もれてしまっているが、これは大谷川の現河道から供給されたものであって、伴

出遺物からみて埋積の年代を中世頃に求めることができる。少なくともその頃には大谷川は現在の位置を流れていたことがわかる。現河道の上限年代すなわち河道つけ替えの時期は、平安時代まで遡らせる根拠はなく、現状では中世以降の仕事とみるべきであろう。

最後に名木川説について検証してみることにする。現在の名木川は、宇治丘陵から流れ出る小河川の水を集めて、自衛隊大久保駐屯地の南側を西流している。ところが明治年間に作成された仮製2万分の1地形図によると、大久保から北北西に流れをとり、伊勢田の北西、第9図A点で巨椋池に注いでいることがわかる。C点付近では、小河川を合するとともに先に検討した大谷川の流れとも連続させており、名木川・大谷川ルートと仮称される大規模な人工流路を形成している。この名木川・大谷川ルートのうち、A点からB点までの間は、条里地割と合緻した正南北方位をとっており、条里制施行期に整備された水路であることを物語っている。B点からC点までの経路は、旧広野村地内から流出してきた水を栗隈の中心地と推定される大久保に集結させた後、尾根2本、谷1本を斜めに横切って伊勢田方面に導水したもので、明らかに人工的に開削された流路であることを示している。C-D間も人工の河道であることは先に述べたとおりである。こうしてみると、名木



第10図 平川古墳群と大谷川(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第19集 第1図を改変)

川・大谷川ルートと名づけたA-D間の河道全線が人工水路ということになる。この区間のうち、栗隈の地から北北西に開掘したB-C間の名木川ルートが栗隈大溝の遺構として最もふさわしいと考えられる。開掘の年代を特定しうる資料は現在のところ提示できないが、A-B間やC-D間より以前に整備された可能性は極めて高いと考えられる。なお、大谷川の水を導水する必要性がいつ頃生じたかは明らかでない。だが、C点以北の水田開発が順調に進み、水不足が生じた段階でC点への導水が計画された公算は高い。C点への導水を計画すると、取水点は必然的に谷口のD点となり、山腹を等高線方向に導水せざるを得なくなったものと推察される。

以上の検討をもとに、名木川・大谷川ルートA-D間の整備課程を復原すると、B-C間、A-B間、C-D間の順に整備されたものと考えられる。

9. おわりに

本稿は、ささやかな古墳測量を手がかりに、私が学生時代に参加させていただいた仕事である『南山城の前方後円墳』の大幅な改訂を模策したものである。いくつかの点で新鮮味を出せたと思うが、論証不十分なまま目新しさを追いすぎた部分もある。また、最新の発掘成果を十分反映できたかどうか、はなはだ心もとない。本人の力量からみてタイトルが大きすぎたことを今になって痛感している次第である。残された多くの論点については、今後長期的な展望に立って地道に解決してゆきたいと考えている。

末筆ながら高橋美久二・平良泰久両氏には様ざまな面で御教示・御協力賜わった。記して厚くお礼申し上げたい。

(おくむら・せいいちろう＝調査第2課課長補佐兼調査第2係長)

- 注1 山田良三・石部正志「山城八軒屋谷土師遺跡調査報告」(『古代学研究』34 古代学研究会) 昭和38年
- 注2 山田良三「山城宇治一本松古墳調査報告」(『古代学研究』42・43合併号 古代学研究会) 昭和41年
- 注3 井上満郎・山田良三「歴史伝承と古墳」(『宇治市史』1 宇治市役所) 昭和48年
- 注4 平良泰久・近藤義行・下村晴文「総論」(『南山城の前方後円墳』 龍谷大学文学部考古学資料室研究報告I、龍谷大学考古学資料室) 昭和47年
- 注5 杉本宏「宇治二子山古墳とその周辺」(『宇治二子山古墳発掘調査報告』 宇治市文化財調査報告書2、宇治市教育委員会) 平成3年
- 注6 杉本宏「宇治一本松古墳測量調査報告」(『宇治市文化財発掘調査概報』4 宇治市教育委員会) 昭和58年

- 注7 奥村清一郎「椿井大塚山古墳の設計図」(『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会) 平成4年
- 注8 注7に同じ。
- 注9 堤圭三郎「成山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1966 京都府教育委員会) 昭和41年
- 注10 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」(『考古学研究』34-2) 昭和62年
- 注11 近藤義行『芝ヶ原古墳』(『城陽市文化財調査報告書』16 城陽市教育委員会) 昭和62年
- 注12 安田清「西山支群」(『山城久津川古墳群の研究』同志社大学考古学研究会古墳研究サークル) 昭和37年
- 注13 平良泰久・近藤義行「平川古墳群の復元」(注4『南山城の前方後円墳』) 昭和47年
- 注14 近藤義行・伊賀高弘・太田勝康「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』17 城陽市教育委員会) 昭和62年
- 注15 梅原末治『久津川古墳研究』 大正9年
- 注16 近藤義行・笠井敏光「久津川古墳群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』5 城陽市教育委員会) 昭和52年
- 注17 近藤義行・伊賀高弘「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』15 城陽市教育委員会) 昭和61年
- 注18 近藤義行・伊賀高弘「平川山道所在遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』13 城陽市教育委員会) 昭和59年
- 注19 注17に同じ。
- 注20 堤圭三郎「青塚古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1964 京都府教育委員会) 昭和39年
- 注21 杉本宏・荒川史・福島孝行『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』(『宇治市文化財調査報告』3 宇治市教育委員会) 平成4年
- 注22 奥村清一郎「京都府南部」(『古代学研究』104 特集各地域における最後の前方後円墳西日本Ⅲ 古代学研究会) 昭和59年
- 注23 『山城名勝誌』ほかの近世地誌が比定。
- 注24 奥野健治『万葉山代志考』 昭和21年
- 注25 吉田東伍『大日本地名辞書』 明治33年
谷岡武雄『平野の開発』昭和39年。谷岡武雄氏は、条里地割との関連を重視し、条里施行期もしくはその直前の開掘になるものとした。
- 注26 注3文献
平良泰久「城陽市の車塚古墳」『史跡でつづる京都の歴史』 昭和52年
注5文献
- 注27 山田良三『考古の旅 近畿北部編』 昭和50年
- 注28 谷岡武雄「巨椋池周辺の開拓」(注3『宇治市史』1) 昭和48年。谷岡武雄氏は、前著(注25『平野の開発』)での見解を修正、開掘年代を仁徳朝まで上げる見解を示した。